

咸陽宮

シテ 秦始皇

ワキ 荊軻

ワキヅレ 秦舞陽

ワキヅレ 大臣

狂言 官人

ツレ (后) 花陽夫人

地は 唐土

季は 雜

シテ「そもそも此咸陽宮と申すは。都のまはり一万八千三百余里。

地「内裏は地より三里高く。雲を凌ぎて築きあげて。鉄の築地方四十里。

シテ「又は高さも百余丈。雲路を渡る雁がねも。鴈門なくては過ぎがたし。

地「内に三十六宮あり。真珠の砂瑠璃の砂。黄金の砂を地には敷き。

シテ「長生不老の日月まで。甍を並べておびたし。

地「帝の御殿は阿房宮。銅の柱三十六丈。

シテ「東西九町。

地「南北五町。

シテ「五丈の旗矛。

地「りうしやの雲井。

シテ「さながら天に。

地「飄り。

歌

「のぼれば玉の階の。く。金銀を研きて輝けり。
たゞ日月の影を踏み。蒼天をわたる心地して。お
のく肝を消すとかや。く。

ワキ、ツレ一声

「思ひ立つ。朝の雲の旅衣。落葉重なる嵐かな。

ワキ

「山遠うしては雲行客の跡をうづみ。

ワキ

「松高うしては風旅人の夢を破る。

ツレ

「たとひ轢門は高くとも。

ツレ

「思ひの末は。

ワキ

「石に立つ。

二人歌

「弥猛の心あらはれて。く。遠山の雲に日を重ね。

やうく行けば名も高き。咸陽宮に着きにけり。

く。

ワキ詞

「急ぎ候ふ程に。咸陽宮に着きて候。先づ奏問申さ
うずるにて候。如何に奏問申し候。燕の国の傍に。
荊軻秦舞陽と申す両人の者。高札のおもてに任せ。
燕の指図の箱。ならびに樊於期が頭を持ちて。是

まで参内申して候。

狂言
「シカく。

大臣「何と申すぞ。燕の国の民に。荊軻秦舞陽と申す両人の者。燕の指図の箱。ならびに樊於期がかうべを持ちて参内したると申すか。かゝるめでたき事こそなけれ。やがて奏聞申し候ふべし。如何に奏問申し候。燕の國の民に。荊軻秦舞陽と申す両人の者。燕の指図の箱。ならびに樊於期がかうべを持ちて只今参内申して候。

シテ「何と燕の國の傍に。荊軻秦舞陽と申す両人の者。指図の箱。ならびに樊於期がかうべを持ちて参内したると申すか。

大臣「さん候。

シテ「急いで参内させ候へ。

大臣「畏つて候。只今のよしを奏聞申してあれば。急いで参内させよとの宣旨にて有るぞ。さりながら御

大法のごとく。太刀刀を汝あづかり候へ。

狂言

「畏つて候。如何に方々へ申し候。急いで御参内あれとの御事にて候ふさりながら。御大法の事にて候ふ間。面々の太刀刀をあづかり申して参内させ申せとの御事にて候ふぞ。太刀刀を賜はり候へ。

ワキ「いかに秦舞陽。太刀刀を参らせよと承り候ふが。

何と仕り候ふべき。

ツレ「御大法にて候はゞ唯まるらせられ候へ。

ワキ「さらば参らせうずるにて候。
狂言「シカく。

ワキ「荊軻は佩剣を解いて威儀をなし。節会の儀式に従

ひて。雲上遙に見わたせば。

ツレ「金銀珠玉の御階を踏み。三里が間をのぼりゆけば。

ワキ「薄氷を踏む心地して。荊軻は既にのぼれども。

ツレ「跡に立ちたる秦舞陽。身体わなゝき手を押して。のぼり兼ねてぞ休らひける。

ワキ

「あゝ不覚なりとよ秦舞陽。燕のいやしき住居にならつて。玉殿を踏む恐ろしさに。臆してあがりかねけるか。

ツレ
「それをなさのみ諫め給ひそ。其磧礲に習つて玉淵を窺はざるは。驪龍の蟠る所を知らず。

地
「げに理とて典獄は。さしも嚴しき禁中に。轅門を解いてゆるしけり。く。

大臣
「帝は之を聞しめし。臨時の節会を執り行ひ。燕使

の参内を待ち給ふ。

ワキ
「舞陽荆軻は大床の。胡床に参着申しけり。

ツレ
「まづ秦舞陽すゝみ出でゝ。樊於期がかうべを皇帝の。上覧にそなへ立ちのけば。

大臣
「帝は笑める御氣色。御心も釈けて見え給ふ。

ワキ
「其時荆軻すゝみよつて。燕の指図の箱の蓋を開き。上覧にそなへ立ちのけば。

シテ
「不思議やな箱の底に剣の影。氷の如く見えければ。

既に立ち去り給はんとす。

「荊軻は期したる事なれば。御衣の袖にむんずとすがつて。剣を御胸にさしあて奉りけり。

后「あさましや聖人人にまみえずとは。今此時にて有りけるぞや。あらあさましの御事やな。

シテ詞

「如何に荊軻。秦舞陽もたしかに聞け。我三千人の后を持つ。其中に花陽夫人とて琴の上手あり。されば毎日おこたる事なし。然れども今日は汝等が

参内により。いまだ琴の音を聞かず。ことさら今は最期なれば。片時の暇をくれよ。彼琴の音を聞いて。黄泉の道をもまぬかれうずると思ふは如何に。

ワキ「いかに秦舞陽。さて何と有るべきぞ。

ツレ「是程まで手ごめ申すうへは。片時の御暇ならば参らせられ候へ。

ワキ「さらば片時の御暇をまるらせうするにて候。

シテ
「如何に花陽夫人。急ぎ秘曲を奏し給へ。

シテ
「さらば秘曲を奏すべし。本より妙なる琴の音に。
飛ぶ鳥も地に落ち武士も。やはらぐ程の秘曲なれば。
ましてや今はの玉の小琴。さこそは御手も尽されけめ。

地
「花の春の琴曲は。花風楽に柳花苑。柳花苑の鶯は。
おなじ曲の轉り。月の前のしらべは。夜寒をつぐ
る秋風。雲井に渡れる雁金。琴柱におつる声々も。

涙の露の玉章。たまさかに。く。人はよも白糸
の。しらべを改めて。君きけや君きけや。七尺の
屏風は。躍らば越えつべし。羅縠の袂をも。引か
ばなどか切れざらん。謀臣は有無に醉へり。群臣
は聖人の御たすけと。押し返しく。二三返の琴
の音を。君は聞し召さるれども。荊軻は聞き知ら
で。唯緩々と侵されて。眠れるが如くなり。時う
つるくと。秘曲たびく重なれば。

シテ
「荊軻がひかへたる。

地
「御衣の袖を引つ切つて。屏風を踊り越え。電光の
激するよそほひ。霞の白玉盤に落ちて。欄干を走
る心地して。銅の御柱に。立ち隠れさせ給ひしか
ば。

荊軻
「荊軻は怒りをなして。

地
「劍を帝に投げ奉れば。番の医師は。薬の袋を劍に
合せて投げ留めければ。

シテ
「帝又劍を抜いて。

地
「帝又劍を抜いて。荊軻をも秦舞陽をも。八つ裂に
裂き給ひ。忽に失ひおはしまし。其後燕丹太子を
も。程なく亡ぼし。秦の御代万歳を保ち給ふ事。
唯是れ后の琴の秘曲。有難かりけるためしかな。